生かされて生きる～東日本大震災の教訓

１．顔の見える関係をつくってください

タテ社会の弱点を謙虚に見直し、お互いの顔が見える関係を作らないと災害対応は不可能です。

２．子ども達の声に耳を傾けてください

子ども達は、自分が必要な人間だと感じ、決して一人ではないとわかったときに幸せを感じます。

３．防災の思いをカタチにしてください。

さまざまな思いを見えるカタチにしなければ、防災の取り組みをしたことにはなりません。

４．マニュアルにない判断力が必要です。

マニュアルや訓練は大事です。しかし、それらを越えた判断をする覚悟を持っていてください。

５．驕りを捨て自然と向き合ってください。

東日本大震災は、自然の恩恵を忘れてしまいがちな人間社会に対する大きな警鐘だったのです。

生き生かし生かされ生きるわが身には命の重さ尊かりけり

「ひとつ上」をめざす

○「生徒を育てるのは生徒である」生徒同士が高め合うと生涯支え合える友情が芽生える。
○「教師を育てるのも生徒である」生徒が本気になればなるほど教師は燃えるものである。
○「学校をつくるのは生徒である」自分の考えを実践する生徒が多くなると学校は変わる。

教育の力とは何か

教育の力とは生徒を幸せにする力である。
生徒が幸せを感じるのは必要とされていると感じたときである。
自分は決して一人ではないと感じたときに孤独から解放される。
生徒は誰かと共感できたときに人とつながることの意味を知る。

教育は決して無力ではなかった。

宮城県石巻西高等学校 慰霊碑

齋藤　幸男
宮城県石巻西高等学校　校長

教育行政は、大震災・子どもの犠牲と正対すべきである
大川小の災害事実を削除した宮城県教育委員会

１．国と県の『東日本大震災における学校等の対応等に関する調査』

私には、今も悔いがある。被災校への支援が十分にできなかったこと、特に大川小への支援が何もできなかったことだ。我が子を奪われた遺族の深い悲しみ、教え子を守ることができなかった教職員の深い悔い。それらの思いは想像に絶する。

2011年３月11日、私は白石市の小学校で４年生を担任していた。４月、６年担任となり、６月には、子どもたちと保護者で被災地・山元町に行き、被災状況をじかに見て被災者の話を伺った。８月には、職場の教職員で東松島・石巻・女川の被災地・被災校を視察した。休日には、被災地・被災校に足を運び、支援活動にも参加した。大川小には何度も足を運んだ。

翌年2012年４月、私は、宮城県教職員組合の執行委員長となった。私は、被災地の教職員組合の委員長として、まず、大震災・大津波による学校災害についてきちんとした認識を持ちたいと思った。そこで、文部科学省が2012年1月に被災3県（岩手・宮城・福島）の幼稚園と小中高校、特別支援校に行ったアンケート調査の報告書『平成23年度東日本大震災における学校等の対応等に関する調査』［2012年3月発表］（以下『文科省報告書』）を読んだ。さらに文科省調査の宮城県分のデータを文科省から提供を受けてまとめた『平成23年度東日本大震災における学校等の対応等に関する調査（宮城県分）』［2012年8月宮城県教育委員会（政令指定都市・仙台市分を除く）］（以下『宮城県報告書』）を読んだ。疑問がたくさんわき上がってきた。

２．大川小の災害を『宮城県報告書』から削除した県教委

『文科省報告書』『宮城県報告書』を読んで大きな疑問は、教育行政は犠牲となった子ども・教職員の命をどう受け止めているのか、ということである。２つの『報告書』は、「津波による人的被害」についての記述は、次の200字ほどの説明で終わっている。具体的な分析は全くない。

しかも、『文科省報告書』と『宮城県報告書』を比べて読むと、調査のまとめの文章は、数字の違いをのぞいて同じ文言だった。「津波による人的被害の状況」も『文科省報告書』と全く同じ文言であった。ただし、『宮城県報告書』は、１カ所違っていて、『文科省報告書』にある以下の太字波線（筆者）の部分が削除されていた。

> 下校中に津波に巻き込まれたとする回答が最も多く、保護者とともに自家用車で下校中に津波に巻き込まれ死亡した、保護者と下校中に巻き込まれて行方不明になった、降園中のスクールバスが津波に巻き込まれたなどが挙げられている。また、学校から小高い丘へ避難中に被災し死亡・行方不明となったケースや、身を寄せていた避難所の施設が津波にあったケースなどの報告もある。
>
> また学校管理下外ではあるが、下校後、自宅にいて避難する際に津波に巻き込まれたというケースも多数報告されている。　（参考資料Ｐ16）

このケースが岩手か福島のケースであれば、宮城県分で削除したことは理解できる。『文科省報告書』参考資料16ページには、各学校のアンケート回答の記述がまとめられている。その中の【小学校】の中に「近くの小高い国道への避難途中、学校を出てすぐのところで津波に呑まれた。学校近辺での死者が多いが、外洋まで流された児童もいる。不明者もいる。」との記述があった。私は、この状況は大川小であると思った。予想通り、その後に宮城県教委が開示した文科省から提供を受けた学校名が記載されていない自由記述に上記の記述が入っていた。また、石巻市教委が開示した大川小の回答票にその回答は書かれていた。

しかし、宮城県教委は、「学校ごとの個票の提供は受けていない」として、私がこの文科省の文章を示して質問しても、「大川小のことかはわからない」と回答した。他の設問のまとめは、数字以外同じ文言でまとめられている『宮城県報告書』は、『文科省報告書』に記述されている大川小の災害を示した文言を削除したのである。宮城県教委はどの学校のことかは不明であるとしながらも、宮城県内の学校についての震災被害を調査した唯一の『宮城県報告書』から、大川小の災害の記述をわざわざ削除して発表したのである。これで大川小の災害、震災と向き合っていると言えるだろうか。これは、絶対に許されない。

３．調査データを持っていない文科省、各学校の被災状況を把握していない県教委

岩手県教委は公表しているが、宮城県教委は大震災による各学校ごとの児童生徒の犠牲者数を今だ公表していない。その理由はわからない。それが宮城における学校被害を正しく認識する妨げになっている。一刻も早く県教委は学校ごとの犠牲者を公表すべきだ。

2012年7月、私は学校ごとの児童生徒・教職員・保護者の犠牲者数の開示請求を行った。その結果、児童生徒と教職員の学校ごとの犠牲者数が初めて明らかになった。しかし、犠牲となった状況については具体的には調査されていなかった。そこで、県教委に対し『文科省調査』に対する各学校からの回答票、文科省に対し仙台市を含む宮城県分の『調査データ』情報開示請求をおこなった。その結果、驚くべきことがわかった。

宮城県教委担当者の話。「宮城県教委として各学校の回答の個票は持っていない。どこの学校がどうなったかは把握していない。今回の『報告書』（宮城県版）は、文科省からのデータの提供を受けてまとめたもの。よって、自由記述もどこの学校のことかはわからない。今後の対策と教訓をまとめるための傾向をつかめばいい。県教委として独自に調査はしていないし、今後の予定はない。」

文科省担当者の話。「今回の調査は業者委託なので、各学校のデータは委託業者が持っている。文科省にはデータとしても文書としても各学校のデータはない。よって、開示請求に対しては『文書不存在』として回答せざるをえない。」

具体的な場所と被災の状況、具体的な事実を把握しないで、どうして生きた教訓がつかめるのか？　さらに、２つの『報告書』には看過できない重大な欠陥があった。

①「津波による被害状況」を「浸水が予想されたいた学校」と「実際に津波が到達した学校」に絞ったために、「予想」も「浸水」もなかった学校の児童生徒の死亡・行方不明を調査していない。②死亡・行方不明者を「学校管理下や下校中」に絞ったために、学校管理下外（自宅や地域にいた）の児童生徒の死亡・行方不明者を調査していない。

４．重大な欠陥のある『みやぎ学校安全基本指針』の改定を求める

そこで、私たち宮教組は、大震災で犠牲となった小中学生２６１名の状況を調査した。その結果は、教職員の管理下での犠牲７４名（大川小７３名、戸倉中１名）、下校中の犠牲者６０名、自宅・地域での犠牲１２７名、（下校中・帰宅・地域の犠牲者のうち保護者引き渡し後７４名）である。さらに判明している高校生・特別支援校の犠牲者９２名を加えると、下校中の犠牲６１名、自宅・地域での犠牲２１８名になると考えられる。（詳細は宮教組発行『子どもの「いのち」を守りぬくために』【第３集】拙稿参照）

つまり、 今回の大災害を子どもの命を守る視点でみれば、①大川小の災害　②下校中の災害　③自宅・地域での災害になる。ところが、『宮城県報告書』を基にして作成された『みやぎ学校安全基本指針』（以下『基本指針』）は、『宮城県報告書』の重大な欠陥を反映し、この３つのことが具体的数値と事実として明確に示されていないのである。大川小の災害と学校在校時以外での犠牲が多かった事実を客観的に示さないでどうして３・１１大震災の学校教育の「課題」「教訓」と言えるだろうか。

『宮城県報告書』では、『文科省報告書』にあった大川小の事実を削除した。『基本指針』で大川小の災害が出てくるのは、県教育長の「はじめに」で触れているのみである。

県教委は、大川小の災害の事実とその問題点・教訓を、県教委として学校現場に明確に示していない。県教委の正式な文書・報告書からは、大川小の災害について知ることができないのである。現在、県教委のＨＰに大川小学校事故検証委員会による「大川小学校事故検証報告書」がリンクされているだけである。県教委として大川小問題を担当し検証委員会を傍聴していたのは県教委義務教育課であり、『宮城県報告書』とそれにもとづく『基本指針』を作成したのは、学校防災担当の県教委・スポーツ健康課である。ここにも県教委の姿勢が示されている。

以上のことから、私は、宮城県教委（さらに文科省）に対して、大震災で犠牲となった子ども・教職員の「いのち」と遺族の思いに正対し、改めて今回の大災害で犠牲となった児童生徒の状況を調査し公表すること、さらにその調査結果と大川小の災害・教訓を明確にした『みやぎ学校安全基本指針』になるようにその改定を強く求めるものである。

高橋　達郎
前宮城県教職員組合執行委員長

プールを見てきました　2014/7/27

夏休みは
毎日プール

プール掃除して、水入れたら
たぶん、みんな遊びに来るよね

プールカードチェックして
準備体操もしっかり
日焼けした笑顔
水しぶきと一緒にあがる歓声

こんな陽射しの日には
プールサイドの
かげろうみたいに
思い出が揺れます

2014/11/3

震災後、ガレキや土で埋もれていて、
唯一清掃していないのがプールでした。
ここはまぎれもなく、毎年子ども達が清掃して
プール開きをして、水かけをして歓声をあげ
一生懸命バタ足を練習した場所

震災後、「瓦礫」と呼ばれているものや
雑草や土に埋もれている場所を前にして、
ふと立ち尽くしてしまうことがあります。

それはかつてどんなもので、
どんな場所で、どんな想いがあったのか…

来年の夏に水を入れたいなぁ。
そんなつぶやきをきっかけにして
９月から、一人、また一人とスコップを手にし始めました。
プールは大川小学校の中で
「人力で復活させられる」唯一の場所かもしれません。
たくさんの方々にご協力をいただき、
ついに、プール（低学年用の小さい方）が底を見せました。

「やったー！」
どこからか、子ども達の歓声が聞こえたような。

大川小学校で起きたことは知っていた
でも『何が起きていたか』は知らなかった 私たち

2011年3月11日の東日本大震災発生後の翌日には、中津川市を出発し、13日に石巻に立っていました。それ以降、2014年12月の石巻支援ボランティア活動まで30回を数えます。3年ほど前から、来るたびに大川小学校跡に立ち寄り、皆で手を合わせてきました。しかし、ついぞ大川小学校で何が問題になっていたかは、（お恥ずかしいことですが）知りませんでした。

私たちはいつものように、中津川市民持ち寄りの支援食糧物資をトラックに積んで、中津川からボランティアバスと並走させ、夜を徹して走り、12月20日早朝着いた石巻市内のあるお宅を会場にして、そこで聞いた講話でようやく知ることとなりました。
講師は、小さな命の意味を考える会代表の佐藤敏郎先生。耳を傾けたボランティアは15名。先生が語り続けられるその間、時間が止まったかようで、誰もが耳から入る音と、目に映る画に集中し、衝撃を受けた様子でした。知らなかった！今日まで、まるで知らないでいた！そんなこととは知らずに毎回、大川小学校跡に行っていた！そこが、そんな深刻なことになっていたとは！それが、お話直後の偽らざる皆の感想でした。

「全ては、『子供たちの小さな命の問題』です。さらには『その命を守っていた命の問題』です。そのように感じさせていただきました。」
それらの命がまだあったとき、守られるべき小さな命はどのように守られていて、何が優先されていたのか、次に、その命が大量に消えるにいたったとき、その元は何だったのか、それが一番。
二番は、命が亡くなって後、周囲の数々の命ある者が命をどう悼んだかです。
二番は、一番の後に付随して出てきた問題ですが、（普段は隠れている）人間の根源的罪が、露呈したものでした。これまでの他の深刻事案と同様、時間のなかで、本質論からどんどん外れ、回避と欺瞞と虚偽、否定と修正の醜態を晒す態となりました。二番が混迷すると、一番も大きく影響されるだけでなく、一番はどんどん隅に押しやられていってしまいます。

そこで、一番の核心に迫るために、こんな問いかけを市民会議ニュースで作成しましたので、引用いたします。（市民会議ニュースは、中津川市内全戸回覧する本会の会報誌です）

お聞きします

地震発生後、大川小学校の児童はいち早く校庭に出たものの、そこでじっとしていることに不安がっていた。その待機時間の長さが、結果として多数の犠牲者を出しました。なぜ、大川小学校の児童の安全を第一に守るべきほとんどの教員が、金縛りにあったかのように、そこから動こうとしなかったのか、なぜでしょう。

＜＜あなたは、大川小学校の先生＞＞

❶あなたは50分間も、なぜ校庭に居続けたのですか。
何が優先だったのですか。

❷その時あなたは、児童の安全確保と考え、
最終的になぜ川に向かって避難を開始したのですか。

＜＜あなたは、大川小学校の児童＞＞

❸友だちと相談して、
先生に「こうしよう」とみんなで言えるかな。

お願い

ぜひ当事者になったつもりで、「私が～だったら」と考えてみましょう。
それが、避難の安全意識を磨き、危険に直面した時に役に立つ訓練となります。
それは、大川小学校で犠牲になった命に、お応えして生きることだと思うから。

人は誰でも、失敗しないように一生懸命努力する。
しかし、時に失敗する。大きな失敗もする。
それを見越して、失敗を減らすため、さらに人は努力する。
そして、どうしていいかわからないことも少なくなるよう、いろいろと人は努力する。
ノウハウ、テクニックとして。
が、しかし、それで終わってないだろうか。

それでも失敗する。失敗はゼロにはできない。そのとき、つまり失敗したとき、どうするかという対策も考えておく必要がありそう。

対策というより知恵、知恵というより智恵、智恵というより精神のベース、精神のベースは良心、相対的でなく絶対的な良心、良心というより支え、揺らぎない自分の心の支え。
精神的支柱で自分をさせていないと、犯した過ち、罪と向かい合えない。
利害を超えて、裸になれない。

一方、和気藹々と「群れる力」と別に、群れを引っ張り「リードする力」の要件も、最終局面では、個人の精神的支柱に求めることができる。つまり、命の意味を少しでも知った者が、自らに課す命題として、日々、命から遠ざからなければ。

加藤　吉晴
中津川市防災市民会議　代表

子どもたちが見ている・・・を真ん中に

2011年の7月、私は初めて大川小学校地域を訪れました。津波で我が子を失った保護者の方々が集まって話し合いをされるというその貴重な場に同席させていただいたことが、今につながっています。発達に偏りのあった子どもの支援を通してその地域とつながり、今なお子どもたちの学習の支援や保護者の方々のケアを続けておられる佐藤秀明先生に同伴させていただいてのことでした。

そこで聞いた、震災直後からそれまでの話は想像を絶するものでしたが、その話し合い自体も私が想像していたものとは全く違っていました。（もちろん皆さんの心の内は想像できるものではなかったのですが、）そこに集っておられた保護者の皆さんは、悲しみを抱えながらも「空から見ている子どもたちに恥ずかしくない自分たちであろう」「あの子たちに話せる解決を見いだそう」との思いを、前向きに丁寧に語っておられた姿が深く印象に残っています。

その後、市や教育委員会とのやりとり、検証委員会の様子、中間報告、最終報告などの情報をいただきながら、また、九州から何度も足を運ばせていただきながら、子どもたちの命ではなく自分たちの立場を守ろうとする、日本の立場ある大人たちの姿に、悔しさで胸が詰まる思いでした。「なぜ、あのような悲劇が起こったか？」は、津波の予測ができたかできなかったかではなく、「なぜ（特に大人の）一人一人が自分（と子ども）の命を守る行動を、**自分で判断できなかったか？**」を丁寧に解きほぐしてゆくことからであり、その背景に日本社会の持っている様々な課題が見えてくるのでしょう。

三年以上たってやっとテレビなども丁寧に取り上げるようになり、皆さんの思いは、大川小学校の悲劇を超えて、世界の子どもたちの幸せを守る大人の輪として、心ある人たちがつながってゆく鎖になっているように感じます。私も、時間をかけて、心を寄せて子どもたちを支え続けているたくさんの方と出会わせていただきました。皆さんが、「子どもたちが見ている・・」を真ん中に、最初の想いと少しもぶれることなく歩み続けておられることを、遠くから変わらずに応援し続けてゆきたいと思います。

山田　眞理子

九州大谷短期大学名誉教授
子どもと保育研究所ぷろほ　所長

「心の少年」

東京町田で、一人の伝説が生きている。
雀鬼、桜井章一。20年間無敗と言われた麻雀の鬼。
彼の周囲には、もう四半世紀以上、その姿を慕う若者たちが集っている。若者（といっても40代も増えてきたが）に対して、桜井はいつも言う。
「心に一人の少年を置け。迷うことがあったら、少年に聞け」と。
私はことあるごとにその言葉を思い出し、縁にしている。何が正しいのかもわからず、手さぐりで進まなければならないことの多いこの社会で、唯一それだけが心温まる道だ。
あの日、大川小学校の校庭で何が起きたのか。どんな会話が交わされ、どんな光景が展開されたのか。正しかったとか間違っていたとかいう大人の論理ではなく、あの校庭に佇んでいた少年の目に何が写っていたのか。
私たちはそのことを謙虚に、少しでも情報を持っている人に尋ねるべきだと思う。
そしてもうひと言、桜井には至言がある。
「心温かきは万能なり」
昔ジャングルで狼に育てられた（と思われる）少年が発見されたニュースがあった。人間たちが食べ物を与えたり寝床をつくったりしても、彼はけっしてそれに手を出そうとはしなかった。
ところが温かい湯を用意して、それにつからせた時、初めて心を開く態度を示したという。
同じ日本人であっても、立場が違うと言語が違ってしまう。異なる一人の神を崇めてしまった者同志は、殺し合いまで始めてしまう。
憎しみの連鎖からは何も生れない。勝者もなく、敗者もない。その心には、廃墟が広がるだけだ。
いまは人々の叡知を結集して「温かな湯」を想像しよう。互いに心を温めて、小さな命が囁く心の声に耳を傾けよう。
あなたの心の少年は、何を囁いていますか？

神山　典士
ノンフィクション作家

この一輪車で
みんな練習したよね。

大川小学校の大津波災害からの教訓
～あの日の大川小学校の校庭から学ぶもの～

「2011年3月11日。あの日、大川小学校の校庭で一体何があったのだろう。」岐阜県から家族を連れて訪れた大川小学校の校庭は、とても悲しく重たい風景でした。私は中学になる娘に問いかけました。「なぜ50分も時間があったのに、すぐ近くの山へ逃げられなかったのだろうか」と。すると娘はこう答えました。「こどもは素直だけど大人は素直じゃないから」と。この答えを聞いた途端、私はゾッとしました。素直であるがゆえ、直感的に山へ逃げようとも思うし、先生の指示に従おうとするのもまた、こども。山に逃げたいと思っても先生から校庭に居なさいと言われたら素直に従うしかないのかと。だとすると、こういった災害はどこにでも起こり得るのではないかと思ったのでした。

害（がい）は仏教が教える煩悩のひとつ。他者への思いやりの心が無い状態だそうです。災害と言う言葉を使いますが、この災害とは、人にも、地球へも思いやりの心が無い状態ではないかと考えるようになりました。

人への思いやりとは、学校現場で言うと、こどもへの思いやりだと思います。全てに優先されることは「こどもの命を守ること」。ご遺族のお話をお聞きしても、あの大津波が襲って来るまでの約50分間、こどもの命が最優先にされたのか疑問が残ります。もし津波が来なかったらどうしよう。山に登って何かあったらどうしよう。誰が責任を取るのか等々、大人の利害関係や人間関係、事なかれ主義が優先されていたとしたなら、とても悲しいことです。ご遺族であり、教員でもある、佐藤敏郎先生は、こどもが命に見えるとおっしゃいます。いざとなったら先生に任せておきなさい。絶対に君たちを守るから。こんな想いが聞こえてきそうです。まさに、こどもの命を真ん中においた思いやり。教師と生徒との信頼関係が必要に思います。

地球への思いやりとは、自然への畏敬の念、感謝の気持ちだと思います。自然破壊や地球温暖化防止への取組みに、まだまだ人類は及び腰です。一方で人類は地震、津波、台風などの自然現象の前には無力の存在です。これを防ぐことはできません。地球が生きている証しなのですから。我々人類は母なる地球から生み出され、そこに生かされている感謝の気持ちを、教員もこども達と一緒になって考えて行くことが学校教育として必要ではないでしょうか。海からも山からも食べ物等々、大自然からの恩恵は絶大です。地球と共に生きている感覚、自然への畏敬の念を教え、1000年に1回の地球のくしゃみの時に、サッと逃げることを教えること。日頃からこの正しく恐れる防災教育が必要と思います。

私は大川小学校の大津波災害を知れば知るほど、こどもの命を真ん中においた防災意識改革の重要さ、人や地球への思いやりの心が大切と考えるようになりました。津波防災は決して巨大な防波堤を作ることではありません。所詮、どんなに頑丈な防波堤も大津波の前では砂の城のようなものなのですから。地球へ感謝し共存するための、正しく恐れる知識を教え、行動すること、それが防災であり、災害から命を守ることだと考えています。そのために、地域の過去災害の歴史を共有し、日頃から災害時にどうすればよいか自主的に考える力を養うこと等が、学校の防災教育にとても重要なことだと思います。無念にも命を落とした、こども達や先生方のためにも、このことを全国へ発信し、行動し続けて行きたいと思っています。

大竹　正道　気象予報士

大川小学校で起きたことから、私たちは何を学ぶべきか

あのとき、大川小学校で何が起こったのか ――――

信じがたい数字

東日本大震災によって宮城県内で犠牲になった小学校生は186人。そのうち実に74名がこの大川小学校での数字です。県内の実に4割が、１か所の学校での犠牲者数です。
まず言わなければならないのは、これだけの犠牲は、決して予想し得なかった津波のせいではない、という事です。ここだけが特異な地形だったのか？先生や地域から見放された学校だったのか？児童は何も判断のつかない特別な子ばかりだったのか？
大川小はごく普通の、どちらかと言えば地元に愛された、のどかで平和な学校だったはずです。「何故この大川小学校だけが」を考えなければ、今後の学校防災の意味がありません。

皆、分かっていた･･･？

大津波警報は聞こえていました。
ラジオもありました。
迎えに来た保護者は「津波が来るから逃げて」と叫んでいました。
広報車も、防災無線も、津波の危険を伝えていました。

スクールバスも待機していました。
11人もの教員が揃っていました。
走れば１、２分の場所には、簡単に登れる裏山がありました。
そして子どもたちは、「山に逃げよう」「ここにいたら死ぬ」と口にしていました。
自分から山に登った何人かは、先生に連れ戻されていました。
そのまま51分間も校庭に留まり、78人が黒い波に呑まれました。

「なぜ」「どうして」―――この言葉ばかりが、この言葉だけが浮かびます。

逃げることをしなかった大川小だけの理由とは ――――

校長は不在だった。しかし教頭、教務主任はいたので、普通に考えれば「逃げる」という簡単な判断はできたはずです。その判断をも失くす、普通ではない要因が潜んでいたのではないか…。

１.たった一人の判断行為

責任者には判断という権限がつきます。校長不在は不測の事態ではないのに、権限委譲がされていなかった。それはいわゆる管理体制が“事なかれ主義”になっていたのではないでしょうか。
権限だけ持ち去って、責任を預ける、そんな構図を見て取れます。

２.「何かあったらどうするのか」

万が一の時…それは何が起こるか分からない意味なので、想定する時点で矛盾と言えます。
「何かあったら」まず危険と考えるのが、正しい行動です。もし「危険だ！」と叫ばれたら、大抵の人はそこから逃げるでしょう。想定することは、危険を忘れてしまいます。津波が来るかも知れない、という危機意識よりも、このままきっと安全だ、との想定が働いたのだと思います。

３.先生は絶対的存在

当たり前かも知れません。でも自分の命のために必死な児童を見ても、行動を起こさなかった。
危機意識は変わらなかった。実は先生たちも権限だけで、責任放棄だったんじゃないだろうか。

これからの教訓とするために ――――

子どもたちは必死になっていた。生きようとしていた。これこそ人の持つ最も大切な「学び」です。しかし残念ながらそれを教える側の先生には、「学び」がなかった。それでこんな大変なことが起きてしまった。しかし、先生だって、生きようとしていたはずなのに。

生きる力はどうやって学ぶのでしょう。
先生は誰から教わるのでしょうか。

子どもたちは守られなかった･･･。
子どもを守るには、どうしたら良いのでしょう。家庭なら、親がその役目です。でもその親が世間から守られていなかったら･･･虐待がこれです。守る立場の人もまた、守られる必要があるのです。

先生に当てはめて考えます。
先生を守るのは、校長教頭といった上司や、教育委員会という組織が第一。それに保護者を含めた地域もそうです。これらは“大人”と括れそうです。先生も大人ですが、広義でのオトナです。果たして私たちオトナは先生を守っているでしょうか？自分自身にも問答します。

このオトナを突き詰めると、どうやら国家に行き着きます。この国は国民を守ってくれているのでしょうか？大川小を考えるとき、つい国づくりを考えてしまいます。子どもたちは『未来』なのですから。その未来が「なぜ」「どうして」のままで失われていいはずがないのです。
私たちはオトナとして、子どもだけでなく、大人も守っていかなくてはならない。親も先生も国会議員も、みんなオトナにならなくちゃいけない。まずはこちらから守ってあげなければ、守ることはできない。最近それを忘れがちなのかも知れない、と感じます。

鈴木　宏輝
高崎市学童保育連絡協議会　会長
高崎市ＰＴＡ連合会　副会長

2014年3月9日、宮城県教職員組合など3団体が主催して「大震災と学校・教育を考えるつどい」を開催した。

そのシンポジウムで、Ｎさんは「教育そのものの原点である『命』という観点から、学校が命を根底とした教育を本当にこれまでやってきたかどうかが問われている」と発言し、学力偏重主義を批判した。そして「（学校が）『学力向上』に特化していく中で、子どもの命の尊さや、可能性や、学びたいという気持ちをまったく無視して進んでいる。そういう人権破壊の状況が背後にあり、その一つとして大川小の問題が出てきたのではないか」と指摘し、被災地に限らない日本全体の教育の現状に警鐘を鳴らした。

東松島市の中学教師のＳさんも、自らの“いのちの教育”実践を紹介する中で、「大川小の件があるから学校はちゃんと命を守らなくちゃいけない、ではない。普段から命をどれくらい大事にして命の教育をやっているかが問われているのではないか。その上に防災教育があるべきだ」と語った。

私たちは、震災文集を3集発行し、「大震災、学校の対応に関する教訓・課題チェックシート」も発行した。微力ではあるが、二度と悲劇を繰り返さないために力を尽くしてきたつもりである。私たちの意識の根っこにあるのは、ＮさんやＳさんと同じように、「命」を守ることこそ教育の原点だということだ。

その意味で、「小さな命の意味を考える会」の取り組みに共感の意を表したい。

瀬成田　実
宮城県教職員組合執行委員長

ツリーが飾られました。

2014/12/14

311Karatsの皆さんが、

今年もツリーを飾って下さいました。

いつもありがとうございます。

毎年恒例になりました。

みんな喜んでるね、きっと。

夜９時まで点灯しています。

2011年

2012年

2013年

2015年もきれいなツリーが飾られました。
ありがとうございます。